

# 巡 検 報 告

## 能 登 半 島 ( 式 教 官 )

1967年4月5～8日

能登は中世的遺物の宝庫だとか、陸の孤島だとかいわれる。なるほど半島を一周して後進的な現象をあちこちでみかけた。

気候条件や地理的位置の不利なこと、又それから必然的に生じる交通の不便さなどにその原因があると思われる。

今回の巡検では主として、能登部の農村工業、和倉の珪藻土工業、近海漁業と海士町、輪島塗り、外浦内浦の海岸地形、穴水のアテ林業、富来の砂丘農業、時国家と喜多家をみた。ここでは能登部の農村工業について述べてみたい。能登上布は江戸時代ごろから盛んになり相当な石高を持つ百性に許され、準備工程はそこで行い、織工程を土地をあまり持たない農家に出して行わせる“出機”の方法がとられた。耕地が狭く需細な農業経営のみでは成立たないため織物が取り入れられているといえる。事実、都道府県中でも石川県は兼業率が高くしかも第2種兼業農家が多いことが知られている。その中で能登半島の占める率が高く、この地方が石川県の中でもより後進的な地域であることを示している。また能登部で織物と農業が結びついているのは奈良から大阪にかけての関西と似ていて口能登が関西と結びついている一端を示している。大正9年の絹の暴落により上布の生産者は減少し、それ以来減少の傾向にある。伝統工芸の悩みはここでもみられ、上布の生産は技術的に難しく、技術を修得するまでに相当な年数と忍耐を要するために引き継ぐ青年が少ないことなど後継者育成の問題がある。

戦後になっての大きな変化は八台機屋の出現である。昭和26年には全くみられなかったものが、31年以降46工場も設立され、特に34～39年に増加している。農家が土地を売って人絹やナイロンデシンなどを織る機械を購入し生産を始めたのである。上布の出機が少なくなったこともこの八台機屋発展の原因の一つである。これらのほとんどは2～5反の耕地を持つ兼業農家で、労力は織りに集中し、農業経営は請負に出されている。家族労働が主力であるが1～2名の従業員の入っている所もある。我々の見学した家では10台の織機を運転し、鐘紡などの大手から親工場を通じてまわされる糸により、ナイロンデシンを織っていた。(4学年 大沢・栗原記)